

ジャック・ロンドン作
「孤独な酋長ローン・チーフの病」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2016-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大矢, 健 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/18119

ジャック・ロンドン作「孤独な酋長ローン・チーフの病」

大矢 健 訳

これは、二人の老人が私に話してくれた物語である。私たちは、蚊よけ用のいぶし火の煙の中に座っていた。一日の涼しい時間、真夜中のことであった。時折、話しながら、煙を越えてやって来て私たちの皮膚の上で軽食を取ろうとする羽根の付いた奴らを、私たちは必死に、そして断固たる意志をもって、ひっばたいていた。右手の方角、つまり下方ということなのだが、崩れた土手の二十フィート下のところを、ユーコン河が音をたてながらのんびり流れている。左手のほうには、低く横たわるいくつもの丘が、その縁をバラの花弁のように見せていた。眠たそうな太陽がけぶっている。その夜、太陽は睡眠を取らない。これからやって来る幾晩ものあいだ、太陽が眠りにつくことはない。

私の隣りに座って勇猛果敢に蚊どもをやっつけていた老人は、ローン・チーフとムツァクといった。二人はかつての戦友で、伝承と大昔の出来事を引き受ける受け皿となってきた老人たちだった。彼らの世代の最後の者たちで、鉱山文明の端っこで育った若い世代にとっては、名誉も何もない老人だ。近頃の連中の誰が、昔からの伝承などに興味を持つだろうか。精霊スピリッツならば黒いボトルから呼び出せる。黒いボトルは、数時間働くか使い古しの毛皮と交換すれば、物わりの良い白人から手に入れることができる。畏怖すべき儀式やまじない師の秘術にどんな権威があるというのだろうか？

だってあの生ける驚異、蒸気船があらゆる法に逆らって、咳き込むように煙をあげユーコン河を行ったり来たりしているのだ。真正正銘、火を吐く怪物である。あるいは、代々受け継がれてきた名譽にどんな価値があるというのだろうか？今は、最大量の木材を切り出した者、船尾外車汽船をうまいこと操舵して島々のあいだの迷路からいちばん速く抜け出した者が、皆の尊敬を得る時代なのである。

事実、あまりに長く生きてきてしまったものだから、この二人、ローン・チーフとムツァクは、最悪の日々を迎えてしまっていたのだ。この新しき時代の秩序にあって、二人には権威も地位もあたえられはしない。だから、彼らはやるせなくただ死を待っていた。それで、蒸気船がやって来るまでのあいだ蚊避け煙の不快感をともしながら、心許せるこの見知らぬ白人たる私に、昔話をしてくれようというのだった。

「それで、女の子がわしのために選ばれたんだ」とチーフは言った。掠かすれてかん高い彼の声は、ときどき重りのように突然沈んで、軋こもむようなガラガラ声に変わる。それにどうにか慣れられたかなと思うと、今度は、キンキンとした高音に戻る。まるで、コオロギの鳴き声とウシガエルの鳴き声を交互に聞かされているかのようなのだ。

「それで、女の子がわしのために選ばれたんだ」とチーフは言った。「カスクタカ、別の名をカワウソ男(ザ・オッター)という我が父が、わしが女を欲情の眼まなこで見ようとせんからと腹を立てた。父はもういい歳だった。我ら部族の長だ。わしが生き残った最後の息子だったから、わしをとおしてのみ、父は自分の血がこれから来る者、まだ生まれぬ幼子おきなごにつながってゆくのを見ることができると考えていた。しかしだ、白い人よ、わしは重い病にかかっていたのだ。狩猟も魚採りもおもしろくない。肉を喰っても体が暖まらぬ。そんなとき、女になど、どうやって興味を持ってよう？ どうして婚姻の宴の準備ができる？ 幼き子どもの無駄口や面倒を、どうやって心待ちにできる？」

「そのとおり」とムツァクが口をはさむ。「なぜならローン・チーフは巨大ギョウド、フェイス熊の腕の中で闘い、頭を割られ、耳か

ら血を流したことがあったのだぞ」

チーフが大きく頭かぶりを振る。「ムツアクの言うことは本当じゃ。やがて、頭の調子は良くなった。良くはならなかったとも言えるが。体がなお痛みが消えても、内側で病を患っていたんじゃ。歩くと膝がぎくしゃくした。日の光を見ると、目には涙が浮かんだ。目を開ければ、世界がぐるぐる回る回りはじめる。目を閉じれば、今度は頭の中のほうがぐるぐる回りはじめる。見てきたあらゆる光景が頭の中でぐるぐる回るんじゃ。目の上のほうが痛かった。まるで重石が何かを載せられたみたいに。額をきつく帯で締めつけられたかのように。ひどい痛みだった。口は重くなり、正しい単語が口に出てくるのに長く待たねばならん。待ってられないとなると、あらゆる言葉が溢れてくる。口から出てくるのは馬鹿みたいな言葉ばかり。重い病じゃった。そんなときに、父、ザ・オッター（カワウソ男）がカサーンをわしの前に連れてきたんだ」

「その娘は強い女で、俺の妹の子どもだった」と、ムツアクがまた口をはさむ。「子どもがたくさん産めるしっかりした尻の女、それがカサーンだ。足がすっと伸びていて走るのが速い。ほかの娘たちの誰よりも上手にモカシン靴を作れた。カサーンが木の皮をつかって編むロープは、誰のロープよりも強い。そして目には微笑みがあり、唇には笑い声がある。穏やかな気性で、男が掟をつくり女がこれに従う、こんなやり方にこの娘は文句を言ったりはしなかった」

「言ったとおり、重い病を患ってたんじゃ」とチーフが続ける。「それで、父、ザ・オッターがカサーンをわしの前に連れてきたとき、わしはこう言った。結婚の準備より葬式の準備をしたほうが良いと。すると、父の顔は怒りで黒くなり、こいつの願いどおりにしてやるが良いと言った。つまり、まだ生きてはいるが死者として扱い、わしの葬式の準備をしてやれと」

「これはもちろん我ら部族の普通のやり方ではないのだぞ、白い人」と、ムツアクが言う。「ローン・チーフになされ

たことは、死者に対してのみ行なわれていた儀式なのだから。しかし、酋長、ザ・オッターは、それぐらい腹を立てていたのだ」

「そのとおり」とチーフ。「父、ザ・オッターは口数が少なく、行動に速い男であった。だから、わしが横になつた小屋の前に集まるよう皆に命じ、皆が集まると、死んだ息子のための葬儀をするようにと命じたのだ」

「小屋の前で皆が弔いの歌を歌った。オオオオオオ、アハアイチクルクックイチクルクック」とムツアクが歌を披露した。歌う場面の再現があまりに見事なものであるから、私の背筋の筋肉が思わず緊張し共感を表わした。

「小屋の中では」とチーフが続ける。「わしの母が顔を煤で黒く染め、髪には灰を被った。わしを死んだ者として弔い歌も歌った。それが父の命令だったからだ。それで我が母オキアクタは大声で弔い歌を歌い、胸を叩き、髪を掻きむしった。わしの妹フーニアクと母の妹シーナターも同じようにした。彼女たちの声のせいで、頭が痛くなったよ。確実に、そしてすぐさま死ななくてはいけない、そんなふう感じたものだ。

「横たわるわしの回りに部族の長老たちも集まり、わしの魂がする旅について話したよ。ある者は、魂が泣きながら彷徨う深く出口なき森について話した。もちろんわしの魂も、そこを彷徨い出口には辿り着かない。急流に荒れ狂う大きな川のことを口にする者もあった。悪霊が金切り声をあげ、形なき腕でもって髪を掴み人を溺れさせる川だ。そんな川があるのなら死者にはカヌーを用意しなくてはいけないと、皆が言ったよ。生きている者が目にしたこともない嵐のことを話す者もいた。星々が次から次へと空から落ち、大地にはいくつもの亀裂がはしり、地球の真ん中からすべての川が溢れ出し、そして戻っていく。ここまできると、わしの横に座っていた皆は手を天に掲げ、大声で泣いた。小屋の外にいた者たちはこの泣き声を聞いて、もっと大きな声を出して泣いた。彼らにとってわしが既に死んでいるのと同様、わし自身にとってさえ、わしは既に死んでいた。いつ、どんなふうにして、ということとは分からないが、間違いなく、

わしはもう死んでいた。

「母オキアクタは、わしの横にリス皮製のジャケットを置いてくれた。それからカリブー革のジャケットも。アザラシの臓物でつくったレインコートや雨のときのためのマクラク長靴も。旅路のあいだ暖かく、びしゃびしゃになつたりしないように。それから、茨イグサとアメリカハリブキだらけの険しい山道のことを言う者があつたから、母はわしの足回りが良くなるよう、分厚いモカシン靴も取ってきてくれた。

「長老たちが大型野獣についてふれ、わしにそいつを倒す義務があると言うと、若い連中がいちばん強力な弓といちばん真っ直ぐな矢、投げ槍とやす、そしてナイフを持ってきた。また、我が魂が放浪しなくてはならん漆黒で音なき巨大空間のことを長老たちが語ると、母はさらに大きなうめき声をあげ、さらなる灰を頭にかけた。

「それからその娘、カサーンがおずおずと音もたてずに小屋に入り込んできて、わが旅道具の上に小さな包みを載せた。その小さな包みに火打ち石と金物、よく乾いた木クズが入っているのが、わしには分かっていた。わが魂が火を熾すときに必要となるものだ。わしの体をくるむ毛布が選ばれた。わが魂のお供をするため死んでもらわなければならぬ、奴隷たちも選ばれた。奴隷は七人だ。だってわしの父は金持ちの権力者だったのだから、その息子に適切な葬式をしてやるのが筋というものである。奴隷たちは、川下に住むムクマック族で、戦いくさで捕まえられたのだ。次の日、まじない師スコルカが彼らを一人ずつ殺すことになっていた。彼らはわしの魂とともに、あの世を旅するのだ。急流荒れ狂う大きな川のところまで、カヌーを運ぶのが彼らの仕事だ。が、カヌーの中に彼らの居場所はない。川べりまで来たら仕事が終わったことになる。そこから先に進むことはない。奴隷たちの魂は、暗く出口のない森に永遠に留まり、永遠に吠えつつけることになるのだ。

「上等な暖かき服と毛布、そして武器を見ていると、そして、殺されることになる七人の奴隷のことを考えていると、

わしは自尊心がくすぐられた。自分が皆の羨望の的になっているのだな、と思った。そんなときも、父、ザ・オッターは黙って真っ黒な顔で座っていた。昼も夜もその日一日中、部族の者たちは、葬礼の歌を歌いドラムを叩きつけていた。終いには、もう千回は死んだような気がしてきたよ。

「しかし朝になると、父は立ち上がり部族の者たちに語った。『皆知るように、自分は生涯、戦士であった。またこれも皆の知るところだが、焚き火の横の柔らかい毛皮の上で死ぬよりも、戦場で死ぬほうがずっと誉れ高い。息子はいずれにせよ死ぬことになるのだから、ムクマック族に闘いを挑み、そこで果てるのが適切というものである。そうやって息子は死者たちの最後の住処オウカにおいても、名誉と酋長の地位を手にすることができる。そうやって父たるわし、ザ・オッターの名誉も維持されるというものである。』。そういうわけで、父は一部隊を編成し川下へ向けて出発するようわしに命じたのだ。ムクマック族と遭遇したら、わし一人が進み出て、闘うようなふりをして、殺されよ、と命じたのだ」

「いやいや、それなんだがな、白い人よ」と、堪えきれなくなったムツアクが大声をあげた。「一晚中ずっとザ・オッターの耳元で、チーフが一人で進み出て殺されるのが良いと囁いていたのは、まじない師のスコルカだったんだ。ザ・オッターが年老い、残ったたった一人の息子がチーフだったから、部族に君臨する酋長になるのは自分だ、こうスコルカは考えていた。でも、昼となく夜となく部族の皆が一日中大声をあげていたから、スコルカは、もしかしたらチーフが死なないのではないかと不安になったんだな。名誉だとか勇ましき行動だとかと美辞麗句をちりばめたザ・オッターの命令というのは、じつはスコルカの言葉だったというわけさ」

「そのとおり」とチーフが答えた。「それがスコルカの仕業であることは分かっていたが、気にはならなかった。重い病を患っていたからな。腹を立てる気がなかった。激しい言葉を出す胆力もなかった。どっちでもいいと思ったのさ。

ただ死んでしまえばいいと思っていた。それでお終いなんだと。それでだ、白い人よ、部隊が編成されることになった。熟練の兵士たちはそこにはいなかった。技と知恵のある年長者もいなかった。いたのは、戦の経験がない百人ばかりの若者たちだ。村中の者たちが、我々の出発を川の土手から見送った。わしを讚美する喜びの声と歌のなか、わしらは出発した。たとえ死ぬ運命にあると分かっている、若者が戦場に出立するのを目にしたら、白い人よ、そなただって喜びの声をあげたろう。

「こうして我ら百人の若者は進軍した。ムツァクも一緒だった。彼も若く戦場知らずだったからな。父、ザ・オッターの命により、わしのカヌーは、ムツァクとカナクットのカヌーのあいだに挟まれるかたちで紐によって固定された。これでわしは漕がなくてよいこととなり、体力を温存できるというわけだ。重い病であっても、最期のときに華々しく戦えるようにな。こうして我らは川下に向かった。

「行軍は長くはなかったが、その話でお主を退屈させたりはせぬよ。ムクマック族の村からそう遠くないところの上流側で、我らはカヌーに乗った二人の戦士に遭遇した。我らを見るなり、奴ら、逃げ出していったよ。ここで、父の命に従って、わしのカヌーは皆から引き離され、一人川下に向けて流されていくことになった。また父の命により、若者たちは、わしが果てるところを見る段取りだった。村に戻り、わしの死にざまを伝えるよう命じられていたのだ。この点に関し父、ザ・オッターとまじない師のスコルカは厳格で、万が一、命令に従わない場合、その者には厳罰が加えられることになっていた。

「わしは、權で漕いで追いかけて、逃げる敵を大声で馬鹿にしてやった。嘲りの言葉があまりに痛烈だったものだから、敵は怒って振り返った。そして、こちらの若者たちが進んでこず、わしが一人で攻めるつもりなのを知った。わしが若者たちとじゅうぶん離れると、二人の敵戦士はそれぞれのカヌーのあいだに距離をおいて、わしを挟み撃ちしようとする。

目論んだ。わしは手に槍を持って、我が部族の戦歌を歌いながら二人のあいだに入っていったよ。二人は槍を投げたが、わしが屈んだものだから、それは音をたてて頭の上を過ぎていった。こちらに傷はなし。それから接近戦だ。右側の奴には槍をお見舞いしてやった。槍が喉に刺さって、奴は背中から川の中に落ちていった。

「ずいぶん驚いたもんさ、人を一人殺してしまったんだからな。そして、左側の男に向けて力いっぱい權を漕いだ。死神の顔を拝むためだ。だが、奴の二本目の槍、最後の一本の槍だったのだが、それがわしの肩に刺さった。ここでわしは奴にのし掛かってやった。槍は投げることはせず、そのまま奴の胸に押しつけた。両手を使ってぐいぐいとね。全身の力を込めて槍を突き通したとき、奴は權の広い部分で一度、二度、わしの頭を叩いた。

「槍の先っぽが背中を貫通し向こう側に飛び出していたのに、まだ奴はわしの頭を叩いていた。そのとき太陽からの一条の光のような閃光が頭の中で光った。そして、何かが弾けたのさ。何かがピカリと弾けるのが感じられた。それまでずっと目の上に載っていた重石が取れたんだ。額をきつく締めつけていた帯が外れたんだ。大いなる歓喜に包まれたよ。心が喜びで歌いだしたぐらいのものさ。

「これが死か、と思った。死というのはこんなにも素晴らしいものかと思った。すると、二艘のカヌーが目飛び込んできた。それで自分が死んでいないと理解した。まだ元気なんだ、と。自分が人を殺したことに気づいた。流血の味がわしを凶暴にしていた。それで、權を漕いでユーコン河の真ん中へと進みゆき、ムクマック族の村へとカヌーを向かわせた。後ろの若い戦士たちは大声をあげていた。肩越しに見やると、彼らの權が白い泡をたてているのが見えて……」

「そのとおり、われらの權は白い泡をたてていた」と、ムツァクが言う。「ザ・オッター、そしてスコルカの命令を覚えていたからだ。自分たちの目でチーフの最期を見届けなければならぬと。後ろに百人の戦士を引き連れ、ローン・チー

フが向かってくるのに最初に気づいたのは、サケの罾のところへ向かっていたムクマック族の若い男だった。彼はカヌーに乗って、真っ直ぐに村へ帰ろうとした。警告を飛ばし戦の準備をさせるためだ。だが、チーフが彼のあとを追った。チーフの最期を見ようとしていた我らが、そのあとを追った。村が目前にせまったところで、岸に飛び移ろうとしていた若者に、カヌーの中で立ち上がったチーフが力強く槍を投げた。若者の腰のあたりを槍が貫く。顔を地面にぶつけながら奴は倒れた。

「ここでチーフは、鬨の声をあげながら戦闘用棍棒を手に岸へと飛び降り、村へ突入していった。チーフが最初にくわしたのは、ムクマック族の酋長イトウィリーだった。奴の頭をチーフが棍棒で撃つと、イトウィリーは地面に倒れて死んだ。チーフの最期を見損なっては一大事と、我ら百人の若者たちも岸へ飛び移り、チーフを追って村に入った。ムクマック族には訳が分からなかった。それで我ら百人も戦のためにやって来たのだと勘違いした。弓が声をあげ、矢がヒューヒューと音をたてて我らの近くに突き刺さる。そこで、我らも自分たちの目的を忘れてしまい、槍と棍棒で闘うことになってしまった。敵は準備もないものだから、殺されるがままさ」

「この手でまじない師もやっつけてやったんだ」と、皺だらけの顔に昔の思い出をよみがえらせたローン・チーフが胸を張った。「このわしの手が奴を倒したんだ。我らがまじない師スコルカよりも偉大とされた、あのまじない師を倒した。このときはもう、敵の戦士に会うたびにこう思った。『死神が来た』と。だが、どれだけ敵を殺しても、死神は来なかった。鼻のあたりの生命の息が強すぎて、死ぬことができないみたいだった」

「我らはチーフを追って村の端まで行き、そして戻ってきた」とムツアクが話の続きを受ける。「狼の群のようにチーフのあとを追ひ、あっちに行ったりこっちに来たり。あっちに行きこっちに戻り。終いには闘う気のあるムクマック族の男は、一人も残っていないかった。それで百人の奴隷、その二倍の数の女たち、そして数え切れないほどの子どもを集

めた。火を放って家も小屋も焼き、村をあとにすることにした。それがムクマック族の最期だった」

「それがムクマック族の最期だった」と、チーフが嬉しそうに繰り返した。「我らが村に戻ったら、財貨と奴隷の大きさに村人たちはびっくりした。わしらが生きて戻ったことには、もっとびっくりしていた。父、ザ・オッターは、わしの偉業への喜びで体を震わした。父が高齢でわしが唯一一人の息子だったからだ。技と知恵のある年長の戦士たちも加わって、皆が集まったみたいになった。そこでわしは立ち上がり、雷鳴の声でこう宣言した。『まじない師のスコルカよ、前にい出よ』と」

「そのとおりなのだよ、白い人」とムツァク。「人びとの膝を震わせ恐怖に戦おそかせる、あの雷鳴の声で」

「スコルカが前に出てきたとき」とローン・チーフが続ける。「俺は死ぬ気になれなかったのだ、と伝えた。だが、墓の向こうで待っている悪霊たちを失望させるのもいけない。それで、スコルカの魂がああ世へ旅立つのがよろしいだろうと考えた。その暗く出口のない森で、スコルカの魂は、永遠に吠えつづけるのだ。それから村人全員の目の前で、わしは立ったままの彼を斬ったのさ。村人全員の目の前で、ローン・チーフの手が、まじない師スコルカの首を落したのだ。ひそひそ声がわき起こると、わしは大声を出して……」

「雷鳴の声で、ですよ」とムツァクが合いの手を入れる。

「そのとおり、雷鳴の声でもって、わしは宣言した。『村人たちよ、見よ。偽のまじない師スコルカを倒したローン・チーフを見よ。俺はたった一人で死の国の門をくぐり、そして戻ってきた。俺の目は目に見えぬものを見てきた。俺の耳は話されなかった言葉を聞いてきた。俺は、まじない師スコルカよりも偉大なのだ。どのまじない師よりも偉大なのだ。さらに、俺の父、ザ・オッターよりも偉大なる酋長なのだ。なぜなら、父は生涯ずっとムクマック族と闘ってきたが、俺は一日にしてムクマック族との闘いに決着をつけた。息のひと吹きで、奴らを滅亡へと追いやった。父、ザ・

オッターは高齢でもあり、まじない師スコルカは死んでしまったのだから、俺が酋長兼まじない師となるよりほかにはあるまい。これより先は、俺がわが民の酋長であり、まじない師だ。異論のある者、前にい出よ』

「しばらく待ったが、誰も前に出てきはしなかった。そこでこう宣言した。『俺は流血を味わってきた。腹が減ったので、肉を持って来るがよい。食料庫を開け、魚棚を開けよ。盛大な宴にするのだ。喜びの歌を催せ。葬式でなく結婚式を執り行なう。そして最後に、少女カサーンを連れてまいれ。カサーンは、ローン・チーフの子どもの母となるべき女なのだ』

「そんなわが言葉に、高齢のためであろう、父、ザ・オッターは女のように泣き、わしの膝に手を回した。その日から、わしが酋長であり、まじない師であった。大きな名譽があたえられ、すべての村人がわしの言うことに従うこととなった」

「しかしそれも、蒸気船がやって来たあの日まで」と、ムツアクがうながした。

「そのとおりじゃ」と、孤独な酋長ローン・チーフが言った。「蒸気船がやって来たあの日まで」。

【訳者付記】

『The Sickness of Lone Chief』。短編集『氷点下の子どもたち』の六番目に収録されている作品。三七〇〇語。「最強の謎解きマスター」と同じく『アウト・ウェスト』誌に発表された。

執筆は「リゴウンの死」の直後であり、短編集最後の作品「老人同盟」の数週間前。一九〇二年三月四日から九日までのだ。この作品のあと、ロンドンはすぐに短編集最終作品「老人同盟」に着手するのではなく、クロンダイクもの「ジーズ・アックの物語」、日本もの「江戸湾にて」、牡蠣海賊もの「白と黄色」などを書いている。ロンドンが自ら

に課したノルマである「一日千語」を着実にこなしながら、多岐にわたるジャンルの短編作品を次々と書いていた時期のことだ。

『氷点下の子どもたち』の中では、「生命の掟」や「老人同盟」と同じく、滅びゆく原住民を象徴する老人を主人公とする話ではあるが、この二篇とはトーンはまったく異なる。軽いのである。プロットは単純で、文明批判も浅く、原住民への理解・同情の感情も薄い。

たしかに作品の冒頭と結末で、「蒸気船」への言及によって白人文化の影響、それも原住民の生活あるいは生存全般への致死的影響について語られている。さらりと触れられるお酒のこと（前作「リゴウン」へのリンクであろう）、これも白人文化由来のものである。このような時代の変化のために、二人の老人は「最悪の日々」を迎えている。しかし、物語の内容は、おもに主人公ローン・チーフが若き頃、いかにして病を克服し——暴力による再生というアメリカ的イデオムではある——酋長兼まじない師の地位を獲得したか、栄光を獲得し成功したのかというもので、その物語内容自体には、それほど興味深い点はないように思う。

けれども、「謎解きマスター」のようなユーモアの効果、それも物語の展開や場面・雰囲気設定によって読者をエンターテインしようという意図があるかといえば、これはまったく感じられない。「軽さ」はエンターテイメントささえ志向していない。じつに機械的なナラティブで構成されており、時代錯誤的な言い方になるが、ガートルード・スタインを思わせる語りの反復が目を引く（スタインは「原始的」文化からヒントを得て彼女流の都市的モダンリズムを開拓した）。登場人物の誰もそれほど重要な役割を担ってドラマを展開するわけではないが、たとえば父カスクタカは、「オッター」と何度も何度も呼ばれる。彼は、作中、数えてみると十七回も「オッター」と連呼されるのである。母のオキアクタの場合がそうではないので、ただ反復、それも音の効果としての反復リズムを狙ったものと思われる。主人公の妹はフー

ニアクであり、母の妹はシーナターという。名前があたえられる必要がない人物の名前。その音自体がその存在価値であるかのである。リアリズムの追求がリアリズムの基礎を切り崩す、そんな場面を読者は目の当たりにする。

これ以上に物語主題の「軽さ」を際立たせるのが、物語から意味を剥奪している運動の反復だろう。重層化された反復運動である。すなわち、「行ったり来たり」という目的や意味に辿り着くことのない運動の描写である。老人たちを「死を待つだけの存在」にしたのは、蒸気船の到来だ。肯定しようが否定しようが、賛美しようが嘆こうが、ここには目的と意味がある。作品の結末部をみれば分かるとおり、このクロンダイクの歴史的事件は、この作品で一定の重要性をもって語られていた。だが、物語形式においてより重要と思われるのは、これが示す運動である。蒸気船はユーコン河を「行ったり来たり」する。主人公が死の国へ逝き帰ってくるばかりではなく、そこでは「地球の真ん中からすべての川が溢れ出し、そして戻っていく」。死の国で彼は百人の村人たちとともに、やはり村の中を「行ったり来たり」していた。そもそもナラティブ自体が、分身関係にあると思しい二人の老人の「行ったり来たり」運動する語りによって成り立っている。いわば「無意味」が無意味に連結されている。

このような語り方は危険である。作者と読者の意識を物語から遠ざけてしまうからだ。物語内容から物語形式へと焦点を移してしまうからである。まったく違うレベル、まったく違う場面の出来事を結びつけてしまい、物語から現実感を奪ってしまうからだ。交互に昔話をつむいでゆく老人語り手の姿とユーコン河の蒸気船の運動には、言うまでもなく、関係があるはずがない。別の瑣末な例をあげれば、作品冒頭でユーモラスに追い払われる「蚊」も、敵部族ムクマック族と同じような扱われ方をしている。語り手たちが「必死に、そして断固たる意志をもって」「勇猛果敢に」ひっぱたく蚊は、フレームされた物語の中でいとも簡単に次々殺されていく敵ムクマック族となんら違わない。ローン・チーフの病克服同様、敵との戦闘に意味の重さがまったくないばかりでなく、パラレルの置かれる「蚊」のエピソードとム

クマック族のエピソードがパラレルの置かれている事実以外に意味がまったくないのである。ロンドンお得意の唯物論——人の死はピシャリと叩かれた虫の最期と変わらない——が実演されているだけだ。リアリズムというモードが闘争をへて獲得されたばかりの時代にあっては、しかし、この危険な語りは特異である。「クロンダイクを实地に見聞し、その経験がゆえに生々しく、本当らしく、リアリスティックにその地の生活や文化を再現できる」とされたジャック・ロンドンの基底価値を揺るがしかねないからだ。

しかしながら、どうもそのような実験を、モダニスティックな、あるいはポスト・モダニスティックな実験と言いうる実験を、詩人を志したことのあるロンドンは一定程度、意識的に行っていったようなのである。そして、それは、よりローカルにロンドンが最初から意識していた人種対立の主題から発していたと思しい。またこれは、その主題を離れ、まったく違う場所に作家を導いたと思しい。

原住民的反復語りの手法は、「白人のやり方」(“The White Man's Way”)でも採用されている。インディアンの人々が語り手となり、その話を白人である「私」にする。このような人物配置をする短編だ。これは、「白人のやり方」は理解不能であると主張するインディアン視点の物語だ。この構図は、本作の直前に書かれた「リゴウンの死」でも同じである。このネイティブの話を書く白人の「私」は、とりわけこの二作、あるいは「白人のやり方」を含めた三作において、おそらく同一人物ではないだろう。そもそもほぼ聞き手の役割であり、その特徴がほとんど明らかにされていないから、この「白人」がロンドンその人であるとも容易には同定できないだろう。それでも、この「白人の聞き手」がJ・ウィリアムズがいうところの「作者的人物」(“author figure”)であるのに間違いはない。作者の分身、あるいは影のように離れない作家の自意識であるとは言いうるだろう。

「ローン・チーフの病」は、ロンドンが以下にみるさまざまな多岐にわたるジャンルの作品を次々と書いていた時期

の作品である。このことを考え合わせると、語りの実験は、やがて著者自身という物語の焦点の発見へとつながったと考えられるのではないか。物語内容より物語形式へ重心が移されることによって、物語より物語作者の存在に焦点が移るからである。

テレビ、ラジオといったマス・コミュニケーション・メディアがまだなかった時代のセレブリティ作家であったロンドンには、彼のハンサムなルックスもあって、とうぜん雑誌新聞メディアの寵児であった。彼のパブリック・イメージは、ゴシップとスキャンダルに彩られていた。これを彼が最初から自分の著作のセールスのために使ったと言いたいのではない（どこかの時点ではあったのだろうとも思うが）。そのような推測をするのには、まだ時期が早いのである。そうではなくて、彼はこの時期、まずその存在自体において読者を魅了できる「ジャック・ロンドン」を創造しなくてはならなかった。これが作家を作品自体に登場させることになったのではないだろうか。

最後に、この短編集の後半の作品（執筆順）がどのような作品との流れで（連関はあまりない）執筆されたかのリストを掲げておく。この「連関のなさ」、つまりジャンルの横断、主題の違い、作品の重さ・「まじめさ」に関係がないことが、ロンドンの特徴の一つだと我々は捉えている。

〈作品タイトル〉	〈脱稿日〉	〈収録短編集〉
“The Master of Mystery”	1901/09/25	CF (6)
“The One Thousand Dozen”	1901/10/03	FM
“The Story of Keesh”	1901/10/14	LL

"In the Forests of the North"	1901/11/02	CF (7)
"To Repel Boarders"	1901/11/08	DC
"An Adventure in the Upper Sea"	1901/11/12	DC
"Local Color"	1901/11/28	MF
"To Build a Fire" [I]	1901/12/15	n/a
"Up the Slide"	1901/12/27	n/a
"Amateur Night"	1902/01/04	MF
"Moon-Face"	1902/02/07	MF
"Bâtard"	1902/01/17	FM
"The Shadow and the Flash"	1902/02/21	MF
"The Death of Ligoun"	1902/03/04	CF (8)
"The Sickness of Lone Chief"	1902/03/09	CF (9)
"The Story of Jeess Uck"	1902/03/28	FM
"In Yeddo Bay"	1902/04/07	DC
"White and Yellow"	1902/04/22	FP
"The League of the Old Men"	1902/05/12	CF (10)

"The White Man's Way"	1905/04/27	LL

- CF = *Children of the Frost* (1902) FM = *Faith of Men* (1904)
 LL = *Love of Life* (1907) DC = *Dutch Courage* (1922)
 MF = *Moon Face* (1906) FP = *Tales of the Fish Patrol* (1905)
 (n) は、『氷点下』作品での執筆順。

『酒の勢』(*Dutch Courage*, 1922) は、ロンドンの死後、妻チャーミアンが編んだ短編集なので、生前に短編集に収録されなかった作品を集めたものという色彩が強。この時期、上の作品は、ほとんど雑誌掲載に、つまり売却に成功している。『男たちの誓』(*The Faith of Men*, 1904)、『まん丸顔の男』(*Moon-Face*, 1906)、『生命への執着』(*Love of Life*, 1907) は、『野性の叫び声』(*The Call of the Wild*, 1903) 以後とすることもあってか、どれも短編集としてのまとまりがそれほど意図されていない。一貫した主題で統一され、作品という全体性がそもそも狙われてはいない。それに対して鮮明な対照をなすのが、本短編集『氷点下』ということになる。一方では「クロンダイクもの」でありかつ処女作『狼の息子』(*The Son of the Wolf*, 1900) の書籍としての統一感を目指しつつ、語りや小説造形の様性へむけての実験があったように思われる。